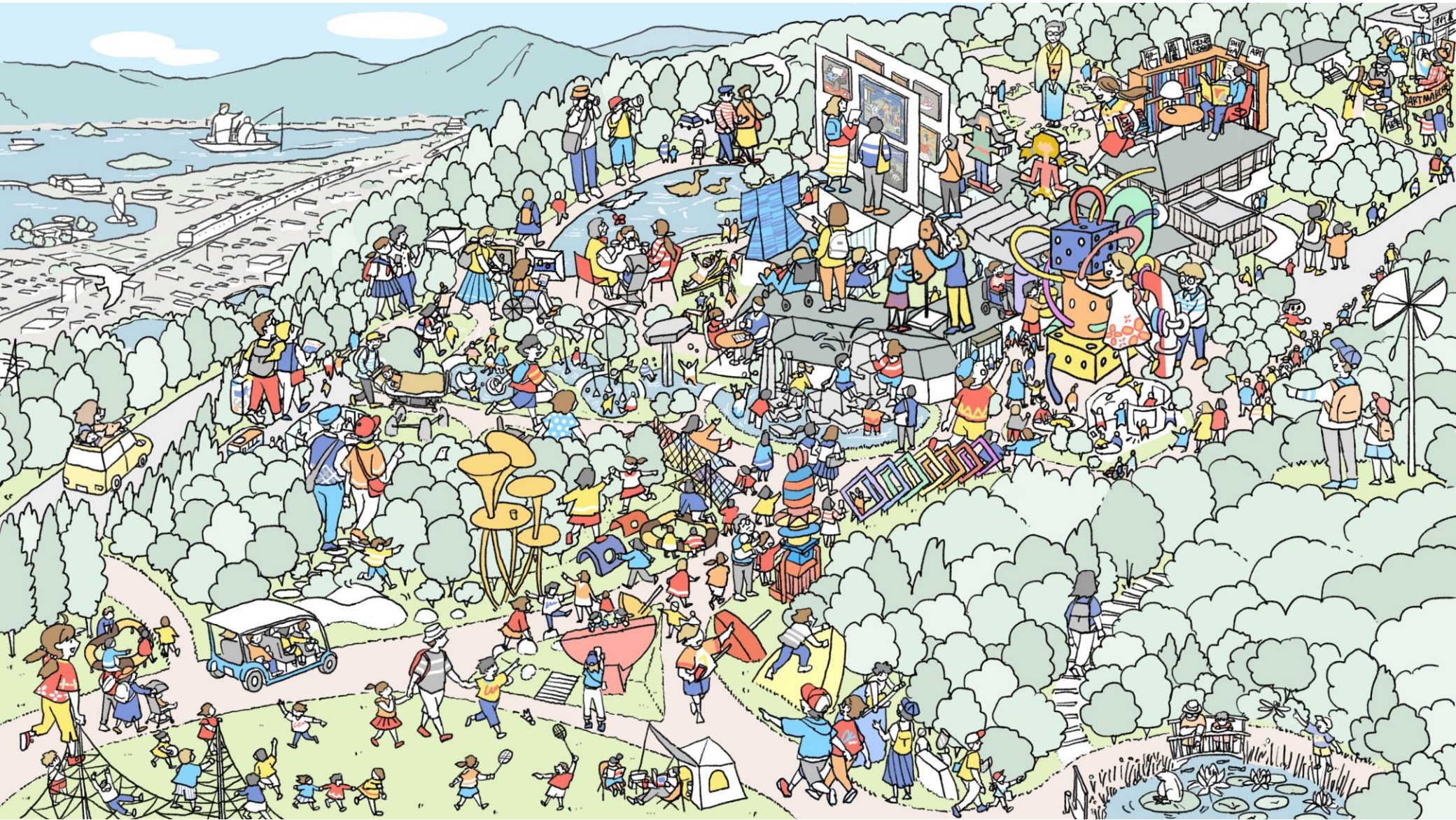


滋賀県立美術館整備基本計画 概要説明資料



CONTENTS 目次

1	美術館整備の経緯	3
2	計画の目指す姿	4
3	整備の概念図	5
4	整備のポイント	6
5	現状と課題	12
6	事業と役割	15
7	施設整備	17
8	整備事業の推進	22

1 美術館整備の経緯

時期	事 項	概 要	整備計画の内容			
			施設設備 老朽化対応	展示室・収蔵庫 狭あい化対応	美術館 機能充実	文化館機能継承 (仏教美術等)
平成25年 (2013年)	「新生美術館基本計画」策定	美術館の老朽化・狭あい化等課題対応と休館中の琵琶湖文化館の機能を継承するための改修・増築を行う整備計画を策定	既存施設・設備の大幅改修	展示室・収蔵庫の拡張（増築）	公園整備 (一部は平成29年に実施)	文化財に対応した展示室・収蔵庫の整備
平成29年 (2017年)	美術館休館 建築工事入札不発	4月に工事準備のため美術館は休館に入ったが、8月に実施した入札不発を契機に、整備を立ち止まり対応方針の検討を行う				
平成30年 (2018年)	美術館の老朽化対策工事を先行させ、早期の再開館を目指す旨を表明	11月にこれまでの経緯を総括し、あわせて美術館の最小限の老朽化対策の先行と早期再開館、美術館の機能向上や琵琶湖文化館の機能継承の検討を進めることを表明				
令和元年 (2019年)	琵琶湖文化館単独整備を表明					(単独整備へ)
令和 2 年 (2020年)	美術館老朽化対策工事着手	早期の再開館に必要な喫緊の課題である安全対策を中心とした老朽化対策のみの改修工事を実施（～令和3年、約12億円）	一部改修工事 (消火設備・耐震・防水対策・トイレ・展示室内装等) 実施	(未対応)		
令和 3 年 (2021年)	「美の魅力発信プラン」策定	3月に美術館と新たに整備する琵琶湖文化館を核として滋賀の美の魅力を発信する全体計画「美の魅力発信プラン」を策定	施設機能の向上について 今後検討を要する事項として記載			
	美術館再開館	6月に喫緊の課題対応の老朽化対策改修工事を終え約4年ぶりに美術館再開館			ロビー周辺の内装刷新、キッズスペース設置等	
令和5年 (2023年)	長寿命化改修工事	施設長寿命化計画に基づく改修	屋根・作品用エレベーター等改修			
令和 6 年 (2024年)	「美の魅力発信プラン」中間見直し 「美術館魅力向上ビジョン」策定	「美の魅力発信プラン」3年目の中間見直しに合わせて、積み残しとなっている美術館の施設機能や面積の課題に対応するとともに、ソフト・ハードを含めた機能向上の方向性を整理し、3月にビジョンとしてとりまとめ				
令和 7 年 (2025年)	「美術館整備基本計画」骨子とりまとめ	3月に骨子を取りまとめ	既存館の改修、増築、子どもがアートに親しめる環境整備、公園と一体となった整備			
令和 8 年 (2026年)	「美術館整備基本計画」策定（予定）	3月に策定予定	本資料のとおり			

2 計画の目指す姿

県立美術館では、美術館が抱える様々な課題や美術館を取り巻く社会情勢の変化に対応するとともに、滋賀の美の魅力を発信する存在感のある施設となるため、外部有識者で構成した美術館魅力向上部会での議論（令和5年7月～12月）を踏まえ、美術館の新たな方向性について調査・検討し、令和6年3月に「滋賀県立美術館魅力向上ビジョン」を策定しました。

ビジョンの概要

1. 現状分析

強み（内部資源・環境のプラス要素）

- ・世界的に見ても有数のアール・ブリュットのコレクション
- ・近代日本画や滋賀ゆかりの美術・工芸等、現代美術の特徴的なコレクションと、関連する調査研究や展示の実績
- ・教育交流事業（ワークショップやアウトリーチ等）の実績
- ・自然環境豊かなびわこ文化公園内に立地
- ・近隣に図書館、大学等教育機関や医療、福祉などの専門機関が多く立地
- ・高速道路からのアクセス利便性

弱み（内部資源・環境のマイナス要素）

- ・展示室の面積が都道府県立美術館としては狭く、コレクションの展示機会、巡回展や新機軸の展覧会の開催に制約
- ・収蔵庫の収容力に余裕がなく、今後の作品増加への対応に支障
- ・展覧会観覧者数が長期的に減少傾向
- ・既存施設の老朽化
- ・ギャラリーの展示環境や面積、搬入動線に制約
- ・野外空間の活用が不十分
- ・駅や近隣施設間の公共交通機関でのアクセスが不便
- ・びわこ文化公園内の園路の歩行環境や案内表示の整備が不十分

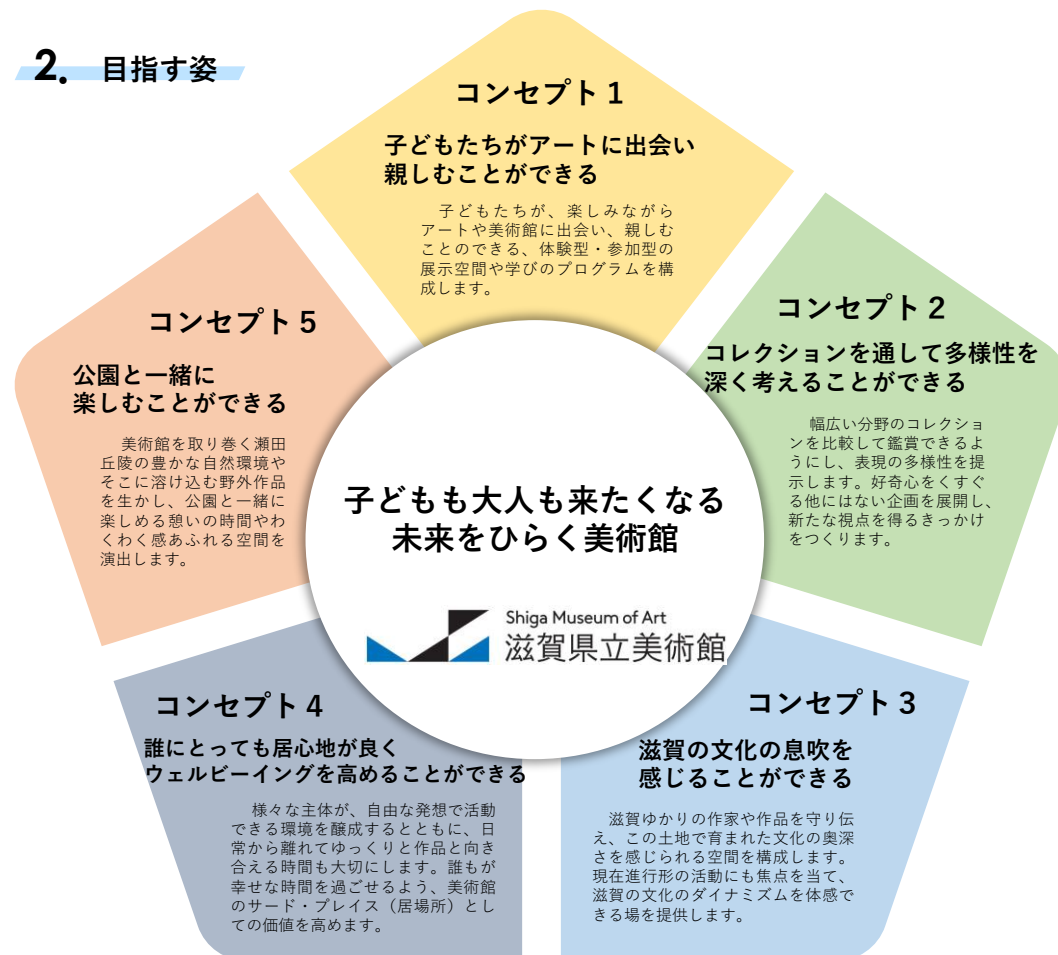
機会（外部資源・環境のプラス要素）

- ・びわこ文化公園へのPark-PFI制度の導入
- ・県全体の15歳未満人口の割合が、全都道府県の中で上位2番目
- ・新名神高速道路の延伸による交通アクセスのさらなる向上
- ・改正博物館法や文化観光推進法の施行等、美術館への新たな役割の期待
- ・国の第4期教育振興基本計画において全国の博物館・美術館等の機能強化・設備整備の促進が明記

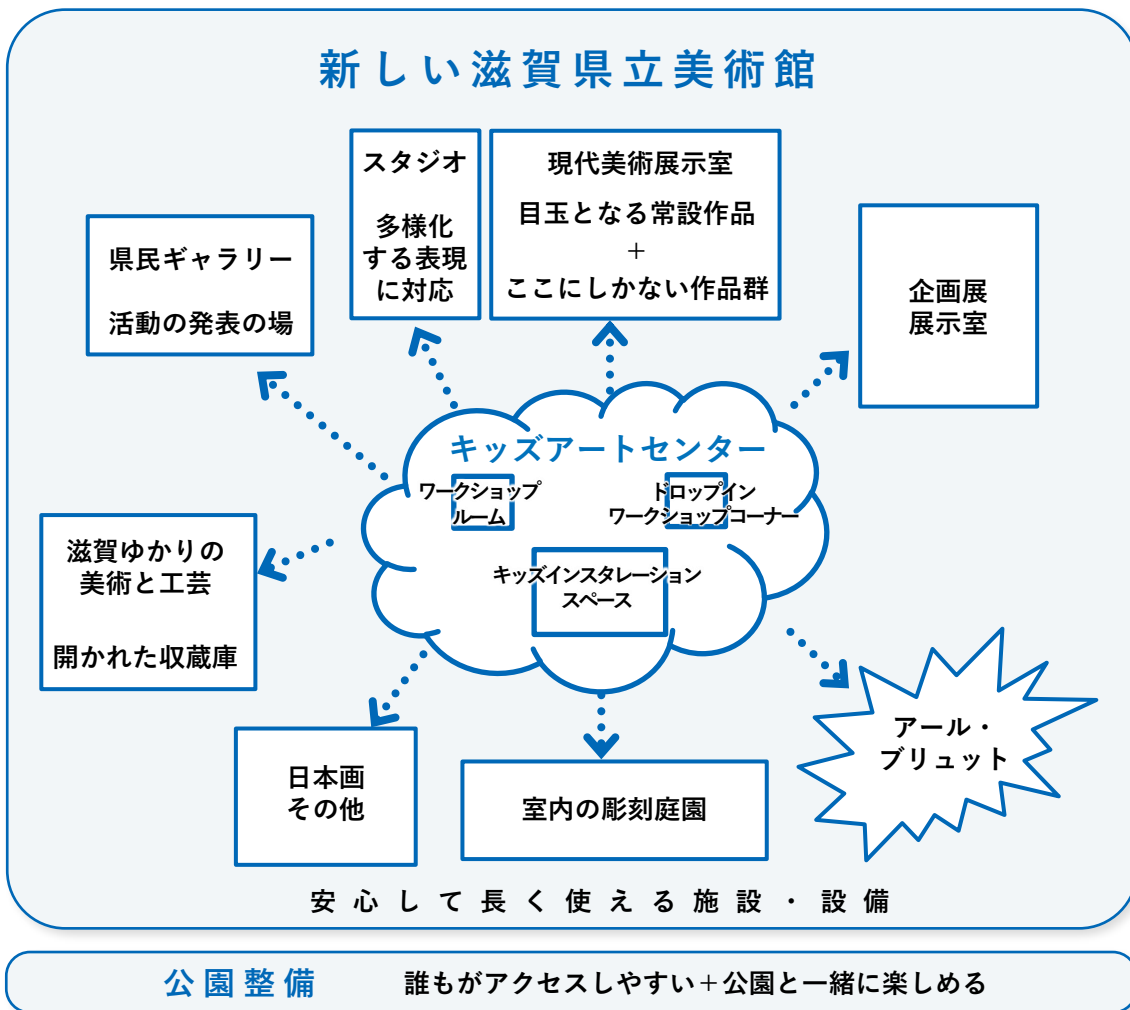
脅威（外部資源・環境のマイナス要素）

- ・余暇の過ごし方の選択肢が多様化し、全国的に美術館のリニューアルや新設が相次いで行われる中、県立美術館の存在感が相対的に低下
- ・展覧会の開催経費（輸送費、保険料等）や館の運営経費（委託費、光熱費等）が高騰

2. 目指す姿



3 整備の概念図



概念図のポイント

1 美術館活動の中心にキッズアートセンターを据える

- ・美術館の片隅ではなく、中心にあると感じてもらえる存在として位置づける
- ・美術館は「子どもにも大人にも開かれ、未来へつながる場所」であることを示す
- ・将来的には県内キッズなら、一度は滋賀県立美術館に来たことがあるように
- ・日本におけるキッズ分野のリーディングミュージアムとなることが期待できる

2 県民共有の財産であるコレクションの有効活用を図る

- ・所蔵作品が十分に公開できておらず、美術館への親しみや共感が育ちにくい現状を打破
- ・国内随一の質を誇る戦後アメリカ・日本の現代美術や世界有数のアール・ブリュットコレクションの空間を持つことで全国的にユニークな美術館となる
- ・これにより、滋賀ゆかりの美術・工芸等もしっかりと展示でき、県立の美術館としての意義をより感じてもらえる

- 県立美術館をゲートウェイにして滋賀が、「世界」と、もっとつながっていく
- ここにしかないアートとの出会いを求めて「世界」の人たちが、滋賀を目指してやってくる

4 整備のポイント

NEW

キッズアートセンターの誕生

キッズアートセンターは、未来の、クリエイティブな滋賀に向けての投資

子どもたちが、早い時期から、難しくはない形で本質的なアート体験をできる場を用意することは、子どもの権利に鑑みて、行政がすべきことのひとつである。また、これを美術館が実施するというのは、未来の観客を育てることにとどまらず、将来、クリエイティブな人材が県内からより多く輩出されていくようになるための布石でもある。



●キッズインスタレーションスペース

遊びながらアートに親しめる体験型・参加型の展示空間

- アーティストやデザイナーとのコラボレーションによって、芸術を感じる心や創造性を育むことが期待できるインスタレーションやプログラムを開発、実践する。
- パリのボンピドゥー・センターが実施している子どものためのアートのスペースなど先進事例を参考とする。（年1回程度の定期的な展示替えを想定）
- 学校との連携により団体観覧の受け入れを積極的に行うとともに、それをきっかけに何度も家族で来館してもらえるよう取組を進めていく。

●ドロップインワークショップコーナー

常設展示室近くに設ける予約不要の創作コーナー

- 展示をきっかけに、創作意欲や好奇心を刺激し、自発的な体験や表現を通じてさらなる気づきや学びを提供する。
- 大人も一緒に楽しみ、世代間コミュニケーションの場を提供する。

●ワークショップルーム

子どもから大人まで、創作活動を楽しめる空間

- 平日は、学校団体鑑賞の受け入れ。週末は、一般向けワークショップ等一区画は、開館時間中なら自由に入出入り可能で、自分で好きに創作もできるフリースペースを設け、居心地よくサードプレイスとしても利用される空間



NEW

コレクション展示の充実＋スタジオを増設

1 現代美術コレクション展示室

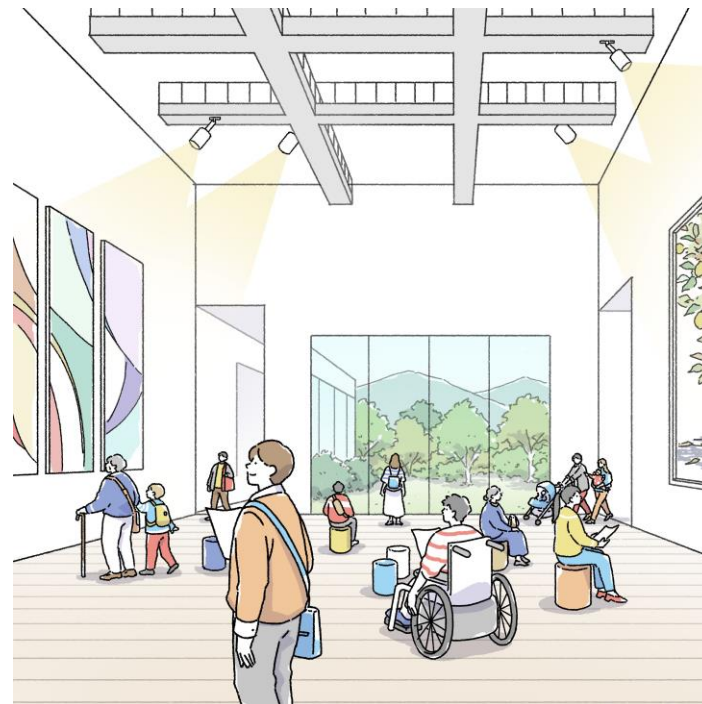
光をキーワードに、ここにしかない現代美術の展示棟をつくる

今、世界の主要美術館でスタンダードとなっている外光の入る気持ちのよい展示空間をつくり、滋賀県が着実に収集してきた20世紀後半のアメリカ美術のコレクションを常設展示。ロスコやスティールなど、アジアではここでしか見られない奇跡のコレクションがあることを打ち出していく。

また、目玉となる作品として、滋賀県立美術館のシンボルとなるような話題性のある作品を新規に収集し恒久設置することで、「滋賀でしか実現できないアートとの出会い」をより魅力的なものとする。

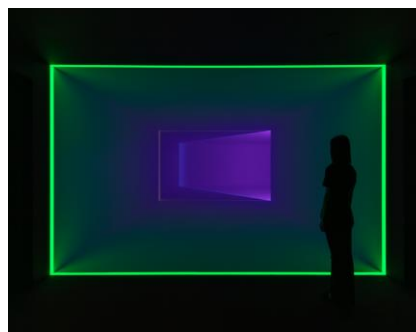
(参考) 検討作品例

没入型（イマーシブ）作品の元祖とも言える
ジェイムス・タレルのインスタレーション作品



光そのものを使った体験型アートであるタレルの作品は、美術史、心理学、生理学、哲学の知識がなくても、「見るとはなにか」「色とはなにか」「感じるとはなにか」ひいては「今ここに立っている私とはなにか」を深く考えさせてくれる点が高く評価されており、高松宮記念世界文化賞も受賞している。

2013年のグッゲンハイム美術館での個展には47万人が訪れたように、アートファン以外にも絶大な訴求力を持っている。



James Turrell, The Wedge, 2025 ©James Turrell



James Turrell, The Looking Glass, Wide Rectangular Curved Glass, 2021 ©James Turrell

2 アール・ブリュットコレクション展示室

世界に誇るアール・ブリュットのコレクションで世界各地と連携

- しっかりとしたボリュームで常設的に鑑賞できる環境の整備
- 関連情報を紹介するコーナーも併設

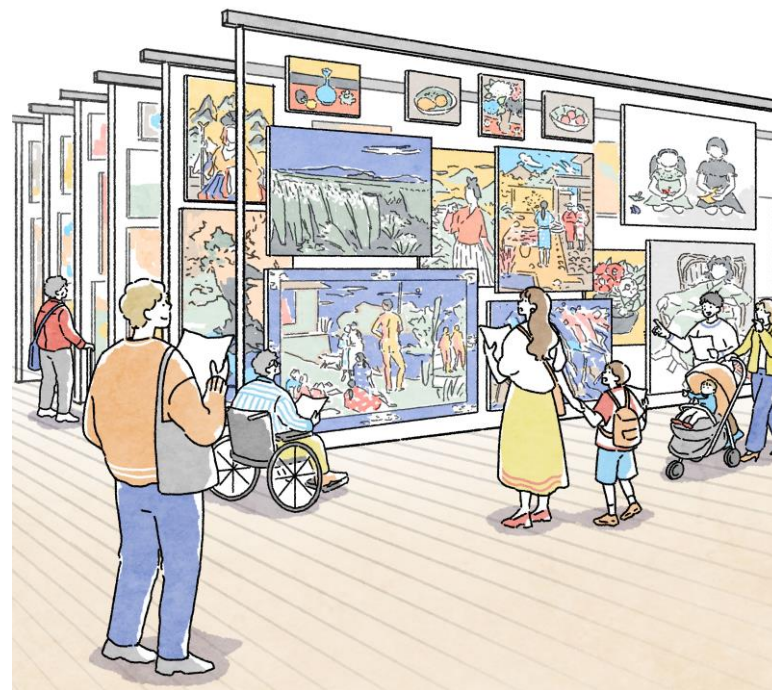
今や世界有数の規模となったアール・ブリュットのコレクションを、滋賀が収集することになった歴史的背景を含めて常設展示をしていくことで、滋賀の文化的な歴史と強みを国内外にアピールしていく。

3 滋賀ゆかりの作品をいつでも鑑賞できる 開かれた収蔵庫としての展示室

オープン・ストレージ（開かれた収蔵庫）× 滋賀ゆかりのアート

- 保管と公開の機能を兼ね備えた
開かれた収蔵庫として展示室を再整備
- 県民の財産であるコレクションの数々を保管しながら、
公開機会を確保する（収蔵対象は、工芸作品など保存環境を踏まえ検討）

滋賀ゆかりの美術・工芸は、従来の選抜型（セレクトティブ）ではなく、収蔵庫のような集積型の展示室とすることで、より多くの作品をいつでも見てもらえるように。これにより、美術館のコレクションが県民の共有の財産であることを明確に示し、シビックプライドの醸成につなげる。



4 室内の彫刻庭園

外光の入る空間で、様々な彫刻に会う

- 様々な彫刻作品・立体作品を、外光が入り公園の緑が見える室内空間に展開することで、晴れの日も雨の日も楽しめる彫刻庭園を実現

コンスタンティン・ブランクーシ、アレクサンダー・コールダー（カルダー）、イサム・ノグチ、アンソニー・カロ、ドナルド・ジャッド、カール・アンドレといった20世紀の彫刻を語る上で欠かせない作家たちの彫刻作品・立体作品、ロバート・ラウンシェンバーグが信楽の工房と協働して制作したユニークな作品、制作拠点として近年注目を集める信楽で制作された様々な作家の作品などを常設。写真が撮れるだけでなく、ゆっくりとスケッチをできるようにイーゼルや画材も準備。

5 日本画その他コレクション展示室

日本画の佳品を、「背景」や特徴的技術を学びながら愉しめる

- 木を基調とした落ち着いた雰囲気の中で日本画の作品を鑑賞できるだけでなく、「日本画（Japanese-style painting）」という概念が明治期に成立することになった背景や、その技術的・素材の特徴についても知ることができる展示室。

当館が誕生するきっかけのひとつである作品群を寄贈された小倉遊亀は、女性としてはじめて日本美術院の理事長になった画家で、現在当館は60件以上を収蔵している。また彼女が属した日本美術院による近代日本画を、当館は収集方針の筆頭に掲げ、結果、安田靫彦らの佳品を所蔵することとなった。

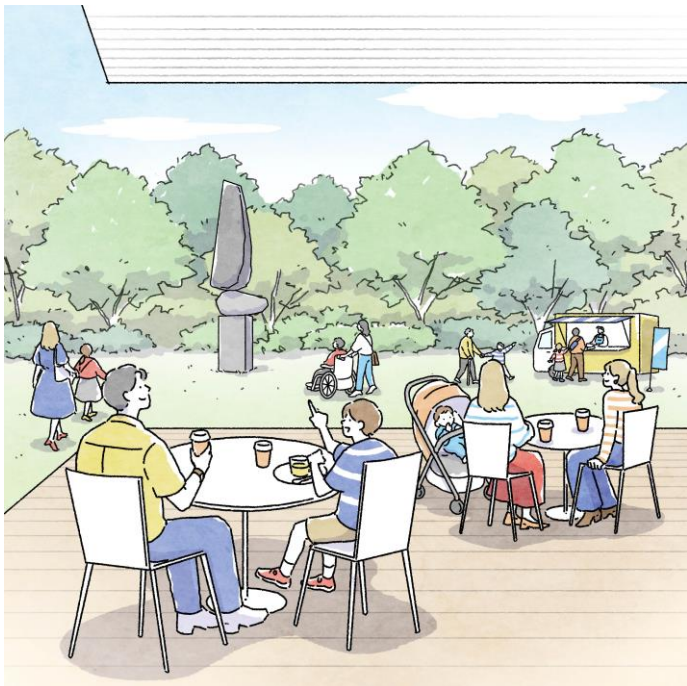
その日本美術院の活動が、近代以降に「日本画」という概念が成立し発展していくプロセスに決定的な役割を果たしたことに鑑み、今回の整備では、日本画の展示室のコンセプトを一新する。もちろんそこでは、日本美術院以外の画家たちの作品、たとえば滋賀県出身で京都画壇を代表する存在となった岸竹堂（20件以上）や山元春挙（60件以上）といった、全国に誇るコレクションも展示する。

6 スタジオ

素材や形式の制約から自由な、新しい美術館ならではの展示室

- 映像インスタレーション、サウンドインスタレーション、パフォーマンス、参加型、水や土を使った作品など、多様化する表現に対応できる展示室
- 美術館による利用を基本としつつ、貸出も可能に（ギャラリーとあわせての一体的利用を想定）

一人ひとりが「居場所」を感じられる、活動の場にもなる美術館に



● 誰にとっても居心地が良い空間の充実

- 館内スロープの改善、カームダウンスペースの新設
- 公園と一緒に楽しめる憩いの空間の充実（ショップ&カフェの充実を含む）
- 彫刻作品を眺めながらくつろげるエリアの充実
- 館内のカフェコーナーに加え、新たにキッチンカーとテラス席による飲食の提供
- 誰でもいつでも楽しめる、創作コーナーの充実

（再掲 ドロップインワークショップルーム、ワークショップルーム）

等

● 生まれ変わる県民ギャラリー

- より多くの県民や団体の創作や活動の発表の場として使っていただきやすいように増築側へ新築移転
- 現在エントランスを利用している搬入出について、来館者動線と重ならない専用搬入出口を設けるとともに、作業しやすい照明や区分使用しやすい可動壁の設置など展示環境の改善



びわこ文化公園と一体となった整備で公園全体の魅力を向上

子どもも大人も、誰もが公園の自然の中でアートや文化、歴史に触れ、楽しめる空間の実現をめざして、公園を含めた一体的な整備を行う



● わくわくする美術館アプローチと公園内の回遊性を向上

- ・夕照の庭や六角広場を美術館へのアプローチに組み込み、園路等を改善することで美術館へのアプローチと、図書館、埋蔵文化財センター、わんぱくはらっぱ等との一体化をより強化
- ・美術館と園内各所を楽しみながら移動できる工夫や園内サインにアートの視点を入れた案内表示で散策を楽しむ

● 野外作品の設置

- ・アートに親しむきっかけや公園のシンボルとなるような作品を屋外、公園内に設置

● アクセシビリティの向上

- ・新しいエントランス設置により駐車場・バス停からの歩行距離を短縮
- ・美術館入口付近に障害者・高齢者用駐車区画や学校団体のバス等の来館にも対応できる停車スペースを確保
- ・バス停の改善
- ・各駐車場の混雑状況がわかる管制システムの導入検討
- ・交通機関との連携による、美術館へのアクセスとしての演出や利便性の向上

5-1 再開館後の現状

1 利用者

[休館前]
H28 (2016) → R6 (2024)

- 利用者数 11万人 → **11万人**
- 満足度 78% → **95%**
- 中学生以下の割合 4% → **11%**
- 障害者の割合 3% → **5%**

利用者数は横ばいだが、
満足度や子ども、障害者の利用割合は増加している

- 各展覧会・教育交流・ギャラリー利用等の総計。実来館者数は6.4万人(R6)
- アンケートにおいて「大変良かった」「良かった」と回答のあった割合
- 展覧会観覧者における割合。
- 展覧会観覧者における割合。介助者含む。

2 コレクション

[令和7年3月時点：2,729件]

- 日本美術院を中心とした近代日本画
- 滋賀ゆかりの美術・工芸等
- 戦後アメリカと日本の現代美術
- アール・ブリュット
- 芸術文化の多様性を確認できるような作品

滋賀ゆかりの作家の作品のほか、現代美術や近代日本画、
アール・ブリュットは全国的に見ても特徴的

- 小倉遊亀、安田靉彦、速水御舟ほか
- 志村ふくみ、清水卯一、野口謙蔵ほか
- ロスコ、ステイル、白髪一雄ほか
- 2016年から収集開始。世界的にも有数
- 2021年から新たに収集方針に加わる

3 展示や取組

- 子どもが楽しめる
- 滋賀県ゆかりの作家の作品や
若手アーティストの展示
- 多様性をより深く感じられる展示
- ウェルビーイングに資する取組

リニューアル以降新たな取組を始めているが、
今後の展開のためには施設面で制約がある

- ザ・キャビンカンパニー大絵本美術展、企業寄附による無料観覧デー等
- 小倉遊亀、笹岡由梨子ほか
- “みかた”の多い美術館展、さわる展示
- 健康や幸福感に良い影響を与えるアートの社会的価値に係る取組。対話鑑賞等

5-2 背景と主な課題

● 背景となる社会情勢や法制度

世界 ICOM（国際博物館会議） ミュージアムの新定義採択（R4.8）
気候の変動に伴う気温上昇やゲリラ豪雨等

国 文化芸術基本法の改正施行（H29.6）
博物館法の改正施行（R5.4）
孤独・孤立対策推進法の施行（R6.4）
地球温暖化対策推進法の改正施行

県 新生美術館基本計画（H25.12）
美の魅力発信プランの策定（R3.3、R6.3中間見直し）
美術館魅力向上ビジョンの策定（R6.3）

● 滋賀県立美術館の主な課題

竣工後40年を超えた施設機能の低下

- ・ 建物や設備の老朽化（経年劣化、水漏れ、空調設備等の耐用年数到来）

将来を見据えた美術館にふさわしい機能の不足

- ・ 展示収蔵環境の制約、社会情勢の変化に伴い求められる機能の多様化
- ・ 建物の環境性能やアクセスの向上等

 **改修や機能の充実にかかる整備が必要**

5-3 施設面の課題

	現況写真等	築後40年の現状・課題	将来を見据えた対応	備考
キッズエリア		- 学校団体の受け入れスペースに制約がある - 一般的な導線と離れた場所にある配置	子どもがアートに親しめるための体験型・参加型の展示空間の充実	
ギャラリー		- 作品の搬出入動線がエントランスからであり制約が大きい - 外光の侵入、貧弱な照明	- 専用搬入出口の確保 - 増築側へ新築移転し展示環境の改善を図る	
展示室		展示面積や天井高の制約により、展示できる作品の数に制限があったり魅力が生きてこない	優れた収蔵品にふさわしい常設展示のためのゆったりとした空間の確保（郷土ゆかり、現代美術）	全国38位
収蔵庫		- 収容力が限界のため今後の受贈・作品収集に支障 - 一般的には美術館における収蔵の役割が見えにくい	収蔵スペースの確保。既存展示室を収蔵庫として活用するなど収蔵機能の見える化との両立を図る	全国31位
公園関連		- バス停、駐車場からの距離 - 悪路、でこぼこ、駐車場からの動線の分かりにくさ	- だれもがアクセスしやすい公園内動線の確保 - 野外作品など公園と一体で楽しめる工夫	
設備等		- 配管劣化による水漏れ - 雨水侵入 - 回廊等結露対策	今後も美術館としての機能を維持していくための施設設備の改修（空調設備更新等）	R3改修は、再開館のための喫緊の課題対応のみ

6-1 根幹となる事業と役割

美術館の事業

- 美術品収集
- 展覧会開催
- 教育・コミュニケーション
- 社会とのかかわり
- リンクと発信

人がつくった様々なものに触れることを通じて、
社会や環境の多様性をより深く感じられる
場をつくる

▶ 滋賀の宝を後世に継承する

▶ 滋賀における創造の場を支える

▶ 子どもたちの学びや育ち、
県民の交流に貢献する

▶ 創造性あふれる
豊かな社会づくりに貢献する

▶ 滋賀の魅力を国内外に伝える

↓
県民の文化の発展および
美術の振興を図る

6-2 今後の展開にあたっての重要な視点

● 子どもがアートに親しめる環境整備と学びや育ちへの貢献

- ・子どもがアートに出会う機会となる展示・イベント
- ・学校との連携による団体観覧や出張授業による来館の促進

● ウェルビーイングへの貢献

- ・子どもも大人も居心地よく過ごし、アートとの出会いを楽しめる環境整備と事業展開
- ・社会とつながりにくい人たちにも開かれた、日常をよりよくすることに資する取組

● 様々な主体とのかかわり

県民・利用者	インクルーシブな美術館として様々な方に親しんでもらう展示やイベント
福祉	福祉や医療分野等との連携による社会的処方の実践
企業	企業や経済界と美術館の協働による事業展開、企業CSR・メセナ
観光・交通	滋賀の多様な文化的資源の魅力に着目した周遊観光の促進、交通アクセスの向上
文化・教育	文化団体や他館との連携、学校連携、周辺の大学や芸術系大学と相互連携 等
公園	THEシガパーク推進会議、県公園緑地検討協議会、県立図書館、県埋蔵文化財センター 等
地域	びわこ文化公園都市の各機関、市町、地域の自治会、団体等

● 新しい琵琶湖文化館との連携

2館が役割を分担・連携しながら話題性や発信力のある取組を展開し滋賀の魅力を発信

- ・県立美術館：県内の近現代美術の中核拠点、アートを通じて未来をひらく取組
- ・新・琵琶湖文化館：県内歴史文化系博物館の中核拠点、近江の文化財の保存活用
互いの収蔵品の活用や共通テーマによる展示など効果的な取組の検討を進める。

7-1 整備にあたり踏まえるべき点

「子どもも大人も来たくなる 未来をひらく美術館」実現のため

今後、設計提案を受ける段階や整備を進めるにあたり踏まえるべき点

- 将来を見据えた美術館にふさわしい機能の確保
- 公園と一体となった整備（美術館へのアクセス向上を含む）
- だれもが利用できるユニバーサルミュージアム
- 持続可能性を見据えた建物（CO₂ネットゼロの推進、県産材活用等）
- 県民の誇り・県の象徴となるような魅力ある建物

7-2 美術館整備に合わせた公園整備の方向性(公園と一体となった整備)

アクセス向上

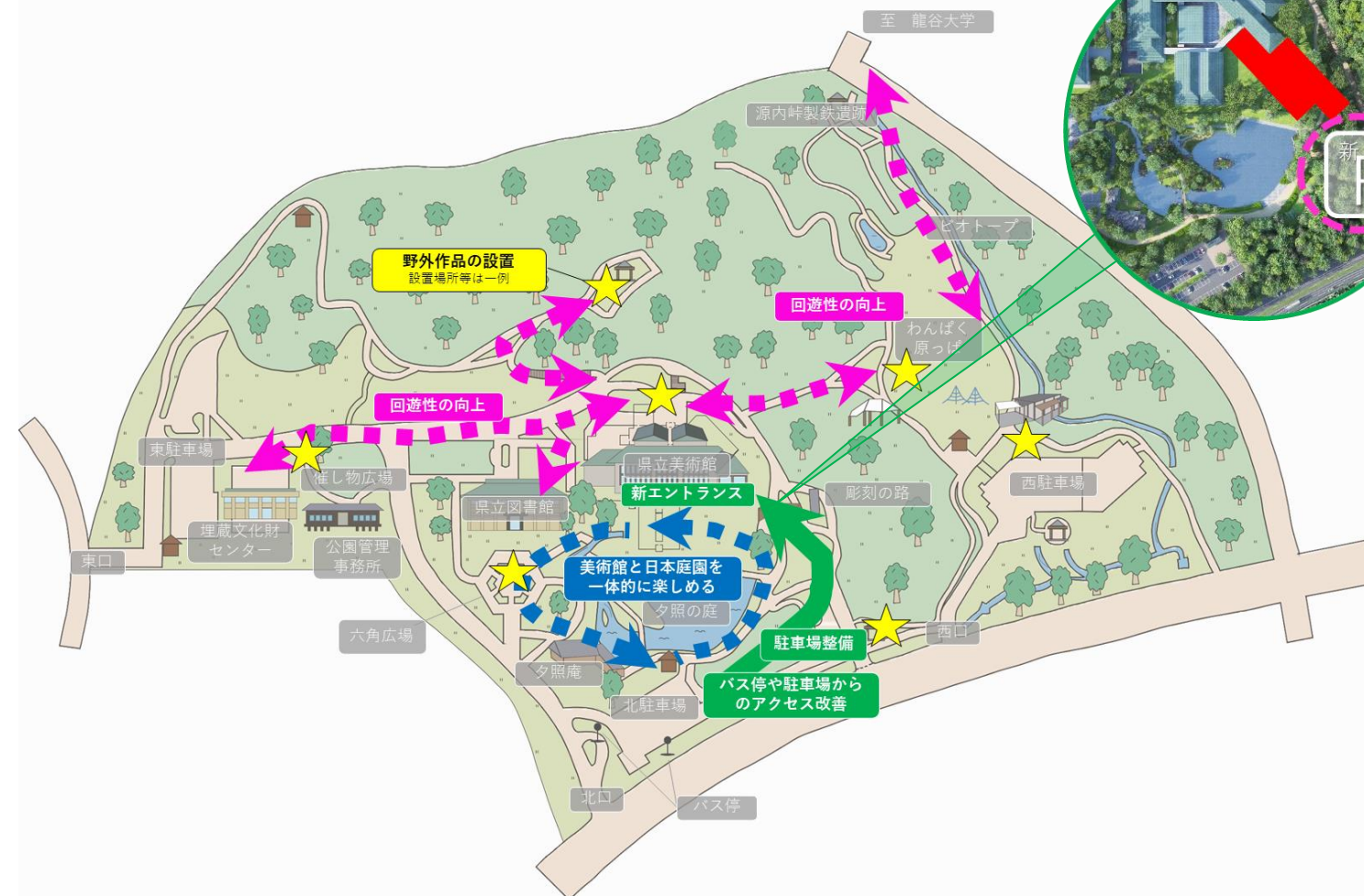
新エントランスおよび駐車場の整備による歩行距離の短縮などのアクセス改善 等

回遊性の向上

野外作品の設置
アートの視点を入れた園内サイン 等

美術館・庭園周辺の魅力向上

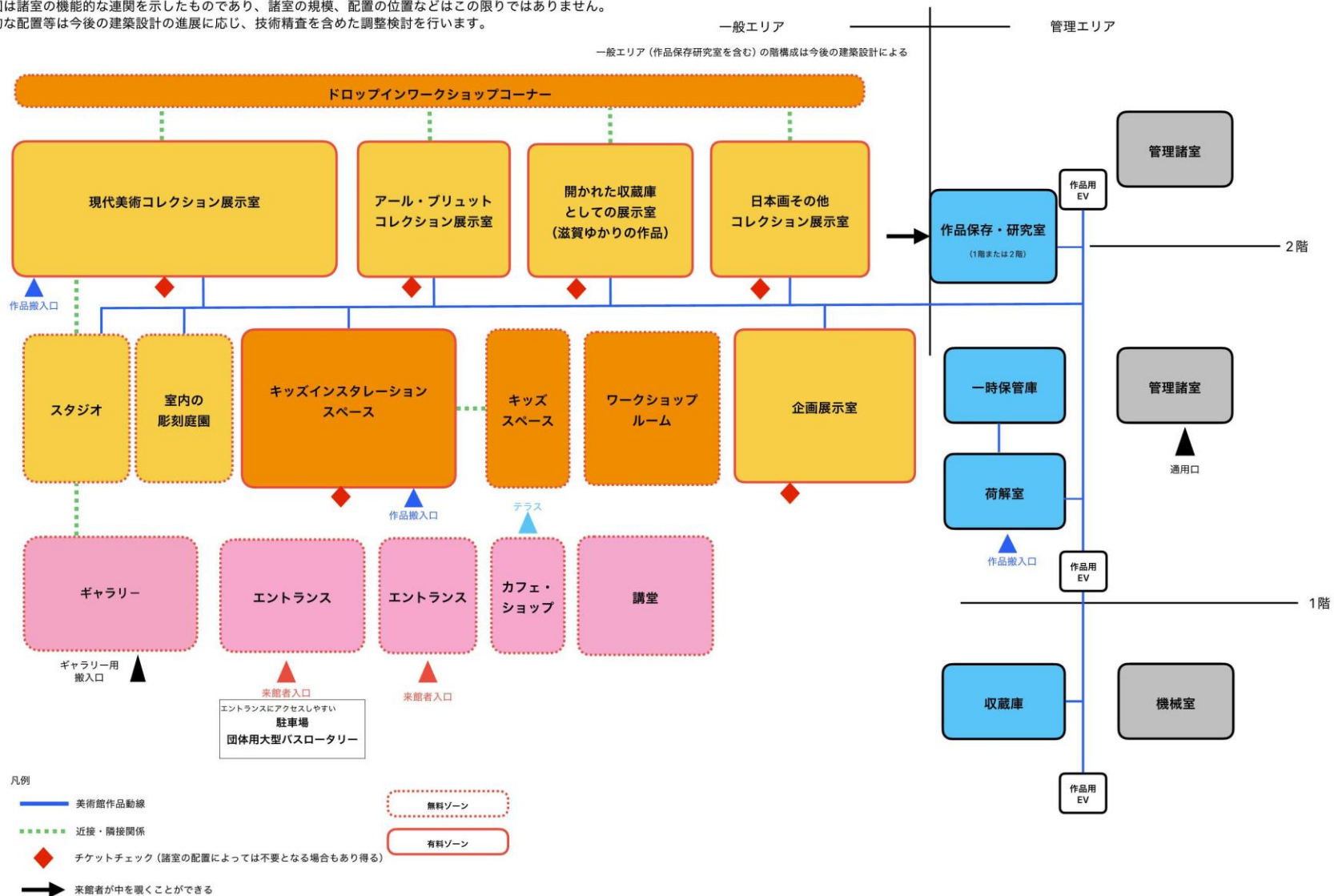
美術館と日本庭園を一体的に楽しめる園路の充実
既存飲食施設やキッチンカーによる飲食の提供 等



※現段階の想定であり、詳細は公募により選定された設計者との協議により具体化する。

7-3 主機能連関図

- ・この図は諸室の機能的な連関を示したものであり、諸室の規模、配置の位置などはこの限りではありません。
- ・具体的な配置等は今後の建築設計の進展に応じ、技術精査を含めた調整検討を行います。



7-4 部門ごとの主な室構成

部門	主な室構成	要件				
		想定面積(㎡)	ゾーン	空調	消火	その他
キッズアートセンター	キッズインスタレーションスペース	600	有料	一般	水	本スペースの存在に気づきやすい位置への配置
	ドロップインワークショップコーナー	80	無料	—	水	四方を壁で囲む必要なし
	ワークショップルーム	160	無料	一般	水	制作スペースと準備室で構成
	キッズスペース	—	無料	一般	水	館内諸室の配置に応じて必要箇所に区画として設けることも可能であるが、少なくとも1区画(室)には水栓を備えた授乳室等を付帯させる
展示	現代美術コレクション展示室	950～1,150	有料	展示室(注1)	ガス(注2)	現代美術コレクションを展示替えしながら展示するスペースと目玉となる作品を常設展示するスペースで構成
	アール・ブリュットコレクション展示室	170	有料	展示室	ガス	アール・ブリュットに関する情報を展示するコーナーを一区画に設ける
	開かれた収蔵庫としての展示室(滋賀ゆかりの美術・工芸)	250	有料	展示室	ガス	展示と収蔵を兼ね備える
	室内の彫刻庭園	260～360	無料	一般	水	共用部等を活用して点在させることも可能
	日本画その他コレクション展示室	550	有料	展示室	ガス	壁面ガラスケースあり
	企画展示室	955	有料	展示室	ガス	壁面ガラスケース、可動壁あり
	スタジオ	310	無料	一般	水	可動壁あり
収蔵	収蔵庫1	427	—	展示室	ガス	空調関係の改修を想定
	収蔵庫2	182	—	展示室	ガス	空調関係の改修を想定
	収蔵庫3	240	—	展示室	ガス	空調関係の改修を想定
	一時保管庫	98	—	展示室	ガス	空調関係の改修を想定
	荷解室	121	—	一般	水	既存のままを想定
共用部等	県民ギャラリー	565	無料	一般	水	展示壁長は可動壁も含め140m以上を確保 ギャラリー専用の搬入車両が横付けできる搬入口および搬入動線を確保
	講堂(木のホール)	235	無料	一般	水	多用途に使える中規模スペース
	エントランス(ロビー含む)	—	無料	一般	水	北側に新エントランスを追加 軽食・飲み物の販売とショップ機能を配置 チケット販売やインフォメーションの機能を持つコーナーを配置
	作品保存・研究室	30	—	展示室	水	壁面をガラス張りとし、美術作品の保全および資料研究活動を公開する
	ボランティアルーム	30～60	—	一般	水	休憩・作業スペースの他、図書その他資料ラックを設置
	静養室	15	—	一般	水	利用しやすい場所への移転とともに静養に適した内装に整える
	展示備品倉庫・器具庫	200	—	一般	水	展示室等の増床等も踏まえ格納スペースを設ける

(注1) 空調欄の「展示室」とは温湿度を既定の範囲内に保つことができる空調仕様をいう。以下同様。

(注2) 想定している目玉となる作品については、ガス消火は必須ではない

7-5 施設整備の想定面積および概算費用

面積は、現在の8,545㎡から、改修増築により、整備後は、約12,000～12,500㎡を想定する

	現在 ①	今回計画 ②	差引 ②-①	増加割合 ②/①	②の主な内容
キッズ	255 ㎡	約 1,000 ㎡	+約 745 ㎡	× 3.9	キッズインスタレーションスペース 約600㎡
展示	1,875 ㎡	約 3,565 ㎡	+約 1,690 ㎡	× 1.9	現代美術コレクション展示室 約950～1,150㎡ 目玉となる新しい常設作品 室内の彫刻庭園 約260～360㎡ アール・ブリュットコレクション展示室 約170㎡
収蔵	1,566 ㎡	約 1,566 ㎡	±0 ㎡	× 1	一部既存展示室を「開かれた収蔵庫としての展示室」化 (展示・収蔵機能を兼ねる。約250㎡)
共用部等	4,849 ㎡	約 6,000 ㎡	+約 1,100 ㎡	× 1.2	県民ギャラリーは増築側へ新築移転 併せて使い勝手を改善
計	8,545 ㎡	約12,000～ 12,500㎡	+約 3,500 ～4,000㎡	× 1.4	面積は計画段階の概算であり、別途、選定された設計者と 設計段階で調整する。

既存施設の改修（主な内容）

老朽化した設備機器の更新

電気：受変電設備、盤類、中央監視設備等
機械：冷温水機等の熱源設備、
空調機・ファンコイルユニット等の空調設備
電気温水器、排水ポンプ等の衛生設備
その他：来館者用昇降機

安全性の向上

集中豪雨等に対応できるよう雨水
排水経路を改善
防火戸レリーズ交換・防火シャッ
ター更新

環境負荷の低減や県産材の活用

改修による建物の長寿命化
設備性能の高効率化
回廊ガラスの複層化
外気の影響を受けやすい諸室の断熱性能の向上
県産材の活用

- 美術館改修増築工事に係る概算整備費 約100億円
- 公園と一体となった整備に係る概算整備費 約30億円
- 設計・調査・工事監理に係る経費 約15億円
- ◇ 整備に伴う機能充実に係る経費 約15億円

(注) 計画段階の概算であり、実際の整備費については、施設・公園の機能や構造、立地等の条件、整備時点の工事経費・物価変動の動向等を踏まえ、決定するものとする。

8-1 目標

● 年間利用者数（実来館者数）

令和6年度 **11**万人（6.4万人）

再開館後 **23**万人（16万人）

増加の内訳

キッズアートセンターの利用者 5万人

展覧会観覧者の増 5万人

イベントやギャラリー利用等の増 2万人



● 来館者の満足度 （「大変よかった」＋「よかった」の割合）

令和6年度 **95.4**%

再開館後 **90**%以上の継続



8-2 事業手法・スケジュール

● 事業手法

- 県では、平成28年(2016年)に策定した「滋賀県公共施設等マネジメント基本方針」において、PPP/PFI方式等の導入可能性を検討する旨の方針を掲げました。
- 上記の方針にかかる県の手続きを定めた「滋賀県PPP/PFI 手法導入検討方針」に基づく簡易検討では、定量的な削減効果は一定見込めるものの、改修を含む本事業特性を考慮すると民間の創意工夫および裁量の余地は少なく定性的効果は限定的になり、従来手法の方が効果的との結果となりました。

● 想定スケジュール

